

## シード演奏で合唱コンクール関東大会へ進出決定！

9月5日(日)、富士通川崎合唱団は、神奈川県立音楽堂において開催された「第53回 神奈川県合唱コンクール」に出場しました。



演奏後、会場外で撮影した集合写真

### 【合唱コンクールとは】

全日本合唱連盟が主催し、年に一度開催されるイベントで、いくつかの部(高校の部、職場の部など)毎に、演奏を競い合います。県大会から始まり、支部大会(私たちの場合には関東大会となります)で勝ち残れば、全国大会に出場することができます。

審査結果は金/銀/銅/奨励賞/賞なしの5つに分類されます。

今年度の合唱部の演奏曲および指揮者は次の通りです。

### ■演奏曲

#### [課題曲]

《G1》Ne timeas, Maria (マリアよ 畏れるな)【作曲：Tomás Luis de Victoria】

#### [自由曲]

Miserere mei (あわれみたまえ) 【作曲：Rihards Dubra】

Ubi Caritas (愛と慈しみのあるところ) 【作曲：Rihards Dubra】

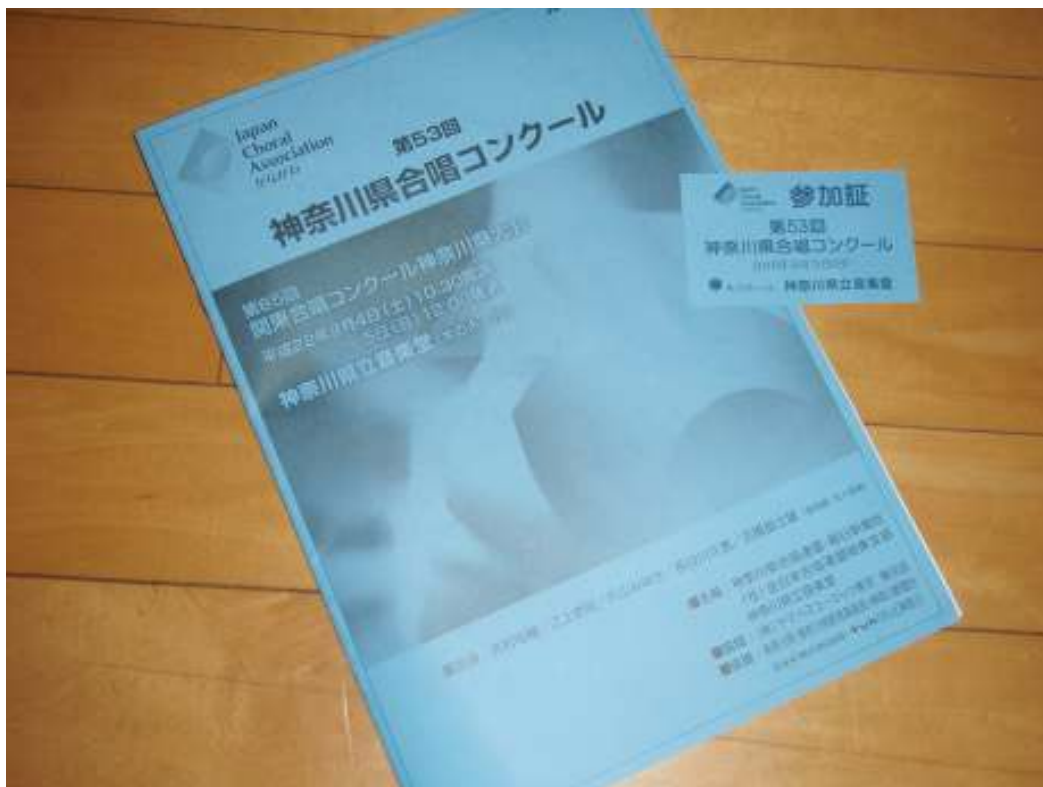
■指揮：加藤雅子

■成績

昨年度全日本合唱コンクール全国大会出場のため本審査対象外

★シード賞（関東大会推薦状付）受賞

■当日の様子



プログラムと参加証

今年は記録的な猛暑、それが9月に入っても暑さ治まる気配を見せず、会場の神奈川県立音楽堂へ続く『紅葉坂』を炎天下、昇って行かなければならないとなると、本番前で低めなテンションの足取りを、更に重くさせます。

「朝の練習ではうまくいったのだから、きっと大丈夫！」と、心細い希望を抱きつつも、心配な点は、曲の出だし。コンクールでの演奏は最初の音が肝心で、失敗してしまうとなかなかリカバリは困難です…。

今回の課題曲“Ne timeas, Maria (マリアよ 畏れるな)”は、ソプラノからの歌い出し、

自由曲の最終曲“Ubi Caritas（愛と慈しみのあるところ）”も、ソプラノが曲のテーマを提示するパートソロから始まります。練習でも中々うまく決めることができず、ずっと苦しんでいる状況でした。

ホールに着いてみると、大会はスタッフ各位のレベルの高い運営により、いつものように整然と進行しています。ロビーでは例年どおり、主催企業である朝日新聞社の「コンクール出場記念号外プレゼント」（申し込むと、希望の団体のコンクール結果の“号外“を無料で貰える）コーナーが出ていました。何とサンプルには、去年の私たちの勇姿が！？ちょっとした嬉しさに心を緩ませながら、気持ちを落ち着かせて、誘導係の方からの声が掛かるのを待ちます。



“号外”見本に去年の私たちが！

すっかり汗も引いて気力も戻ってきた頃、いよいよ舞台裏への移動となりました。ここからの1時間は、衣装に着替え、リハーサル、舞台袖での待機、そしてステージ…という、決められた、分刻みのスケジュールです。

さあ、いよいよステージへ！ 下手から2列で山台へ上がります。舞台人となるからには、舞台袖から出る瞬間から退場で袖の陰に消える瞬間まで、優雅に魅せ続けなければなりません。客席に向き直ると、最後から2番目という出演順でもあるせいか、すでに演奏

が終わった団体の方などで、ステージから見える席はかなり埋まっていました。



本番ステージ

指揮者のタクトが振り下ろされ、課題のソプラノの出だし…！ 躊躇わずに出られたことが収穫です。始まってしまえば、この曲はあくまで美しく、音を重ねていくことができます。

自由曲の“Miserere mei (あわれみたまえ)”は、縦に揃った繊細な和音が聴かせどころ。抑制された前半と対比するような中間部～後半をドラマチックに鳴らすことを目指しました。練習でも、音程に非常に苦労した曲です。道筋は踏み外さずに歌いきることはできましたが、まだまだ勉強の余地があります。

そして、ソプラノの最難関、自由曲の最終曲出だしのパートソロは…。綺麗に整えて歌うことができました！ 昨年から、ソプラノのボイストレーナーの先生にもレッスンをお願いしており、先日も特訓したところだったので、その成果かもしれません。後は、音に心乗せ、気持良く響かせ切ることができたのでした。

結果、シード団体としての役割を果たし、関東大会出場への推薦を頂く事ができました。



シード賞の賞状を持つ富士団長

暑さの残る夕風の中、これから秋の深まりとともに、私たちの音楽にも更に彩りを深めていけるような予感を抱きつつ、軽い足取りで『紅葉坂』を下りました。

【記事・写真提供：富士通川崎合唱団 ソプラノ・松林京子】